

## 4 月第 2 週の礼拝説教

■日 時：2023 年 4 月 9 日（日）10：30－11：30 復活節第 1 主日（イースター）

■説 教：保科けい子 牧師

■説教題：「出来事に驚きながら」

■聖 書：ルカによる福音書 24 章 1～12 節（新約 p159～160）

■讃美歌：325 「キリスト・イエスは ハレルヤ」

327 「すべての民よ、よろこべ、」

主イエス・キリストの復活を喜び祝うイースターの日を迎えました。キリスト教とは主イエス・キリストの復活にその根拠があると言われていています。言い換えれば、主イエス・キリストの復活こそ、私たちの救いとそれによって与えられる喜びの中心なのです。しかし、キリスト教のカレンダーの中で、イースターほど説明が困難な事柄はありません。また、信仰を持つとする時に躓きになるものもありません。このことは、キリスト教会が誕生した初めのころから問題になっていたと思われます。本日取り上げていますルカによる福音書より 20 数年前に、使徒パウロによって記されたコリントの信徒への手紙一 15 章 12 節以下にも次のように記されています。「キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずですよ。そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。」そういうわけで、2000 年近くにわたって問われ続けてきた「主イエスの復活を私たちはどのように信じていくのか」ということについて、ご一緒に考えてまいりましょう。

ところで、主イエス・キリストの復活は週の初めの日、つまり日曜日の朝の出来事でした。そのことを覚えて、キリスト教会は日曜日を「主の日」と呼んでその日に礼拝をささげてきました。つまり教会は毎週日曜日にイースターを祝いつつ歩んでいるのです。しかし、主イエスの復活の出来事を描いている福音書は、マルコによる福音書の「婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり、正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。」を初めとして、あまり肯定的な描き方はされていません。当時の光景が私たち人間の日常生活にとっては異常なものであったことを記しています。そのような震え上がり正気を失うような恐ろしさや悲しみ嘆きの中にいる者が、どのようにして喜びへと変えられていったのか、イースターはそのことを深く考える時でもあるのです。

さて、本日の聖書箇所にまいりましょう。24 章の 1 節は「そして、週の初めの日の明け方早く、準備しておいた香料を持って墓に行った」と書き出されています。墓に行ったのは、イエスと一緒にガリラヤから来た婦人たちで、10 節に「マグダラのマリア、ヨハナ、ヤコ

ブの母マリア、そして一緒にいた他の婦人たち」と具体的に名前が記されています。これらの女性たちは、主イエスがガリラヤで福音を宣べ伝えておられた頃から従っており、主イエスと一緒にエルサレムにまで来ていました。そして、主な弟子たちが身の危険を感じて逃げ去ってしまったときにも離れず、主イエスの十字架の死を「遠くに立って」見ており、その埋葬までを見届けたのです。主イエスは安息日が始まろうとしていた時に急いで埋葬されたので、十分な葬りの準備がなされていませんでしたから、彼女たちはもう一度丁寧に埋葬しようとして、遺体に塗るための香料や香油をもって主イエスの墓に行ったのです。すると、墓の入り口を塞いでいた石がわきに転がしてあり、墓の中に主イエスの遺体が見あたりませんでした。彼女らは、「途方に暮れていた」と4節の初めにあります。イースターの朝は、この婦人たちが主イエスを失った絶望の中で途方に暮れたということから始まったのです。

その婦人たちの傍らに、輝く衣を着た二人の人が現れました。恐れて顔を伏せた婦人たちに、「なぜ、生きておられる方を死者の中に捜すのか。あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ」と主イエスの復活が告げられたのです。ある方は、この語りかけを、あなたがたは主イエスを捜しているが捜す所が間違っている、と読み取っています。主イエスは、死者を埋葬する所である墓の中にはおられない、だから墓をいくら捜しても主イエスを見つけることはできない、なぜなら主イエスは復活して生きておられるからだ、と二人の人は婦人たちに告げたのです。けれども、この知らせを聞いた彼女たちにとってこの知らせは、ますます混乱させられるようなものだったことでしょう。なぜなら、復活ということが自分たちの通常の感覚を超えており、どこへ行けば会えるのかが示されていないからです。マタイによる福音書とヨハネによる福音書では、天使のお告げの後、復活した主イエスが彼女らに現れて下さったことが語られています。しかしルカはそのようには語っていません。そうではなくて、二人の人は、「まだガリラヤにおられたころ、お話しになったことを思い出さない。人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか」と語りました。つまり、主イエスのお語りになった言葉を思い出して、私たちの語ったことを信じなさい、と二人の人たちは言ったのです。

8節には、「そこで、婦人たちはイエスの言葉を思い出した」とあります。以前にそれを聞いた時には、主イエスが語っておられる言葉は何のことか分からなかったし、これまで付き従ってきた主イエスが捕えられて殺されてしまうなどということは考えたくもなかったのでしょう。しかし今、主イエスの十字架の死を目の当たりにし、そしてその遺体がなくなったという現実の出来事に直面し、二人の人の語りかけを受けたことによって、主イエスの御言葉が彼女たちの心にもう一度よみがえって来たのだと思います。そして、彼女たちは、十一人の使徒たちとほかの人たち所へ行って「一部始終を知らせ」ました。しかし、心からの喜びをもって知らせたかと言えば、本当に主イエスは復活して生きておられるのだろうか、と揺れ動いていたというのが彼女たちの状態だったのではないかと思うのです。そのこ

とはまた、一年に一度、必ずイースターを迎える私たちの心の奥深くに横たわっている問題でもあるのです。主イエスは復活して今も生きておられる、教会はそのことを告げ知らせています。教会がこうして日曜日に礼拝を守っているのは、週の初めの日に主イエスが復活なさったことを記念してのことです。そして私たちは、主の日の礼拝ごとに、主イエスの復活を信じてその十字架の死と復活によって神様が与えて下さる救いをいただいてその喜びに与っていくのか、それとも、主イエスの十字架と復活の出来事がどうもよくわからない、そのことさえなければ私は主イエスに心から従えるのに、という思いの中を歩み続けるのか、そのことを問われているのです。十一人の使徒たちもその問いの前に立たされました。11節に「使徒たちは、この話がたわ言のように思われたので、婦人たちを信じなかった」とあります。

しかし、そのような中で、ペトロだけは違う行動をしました。12節に「しかし、ペトロは立ち上がって墓へ走り、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布しかなかったので、この出来事に驚きながら家に帰った」と記されています。「主イエスは生きておられる」という二人の人のお告げを婦人たちから聞いたとき、生前に主イエスが語っておられた受難と復活の予告の言葉を思い出し、ペトロは立ち上がり墓に向かって走り出したのです。しかし、そこには、主イエスの遺体を包んでいた亜麻布だけが残されている空虚な墓があるだけでした。ここで記されている「この出来事に驚きながら家に帰った」というペトロの行動から、そこでは彼自身に何が起きているかを考えさせられます。その出来事の意味を考えることはもちろんですが、実は私たちは、深いところで自分自身を見つめるということをさせられているのではないか、と思うのです。ペトロの場合は、ルカによる福音書22章31節から32節に記されている主イエスの語りかけの言葉を思い出したのではないかと、私は確信しています。「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい」という御言葉です。繰り返しになりますが、ルカによる福音書だけが、空虚な墓の前で婦人たちが「イエスの言葉を思い出し」ていることを記しています。そのことと関連付けて考えるなら、12節で描かれるペトロの行動もまた、主イエスの御言葉を思い出していると考えたいのです。そして私たちもまた、このイースター礼拝において、これまでに主イエスから語りかけられた御言葉を思い出しながら、新しく歩み出してまいりましょう。